

くまにち 論壇



恵泉女学園大学長

大日向 雅美

おおひなた・まさみ 発達心理学。「母性愛神話の畏」「女性の一生」「自己肯定で幸せ子育て」など著書多数。75歳。

まもなく4月、新年度が始まる。新しい職場や学年に進む若者や子どもたちは、期待と不安に胸を膨らませているだろう。そんな彼らの心を虜にした映画『国宝』について考えてみたい。興行収入200億円、観客動員数1400万人を超え、日本映画史に名を刻む作品である。封切から9カ月を経てなお勢いが衰えず躍進を続けており、社会現象ともいわれている。

舞台は日本の伝統芸能である歌舞伎だが、観客層は年配層だけでなく、若い世代が多数を占めているという点も興味深い。私も幾度か劇場に足を運んだが、3時間近い上映後のエンドロールを、ほとんどの人が身じろぎもせず見入っていた。

何が観客、とりわけ若い世代をここまで惹きつけているのだろうか？これまで馴染みのなかった日本の伝統芸能の魅力が若い世代を自覚めさせたという評価もあるが、それだけでは説明しきれない力をこの映画は秘めているように思う。

物語は、歌舞伎とは無縁の世界から役者となった主人公の喜久雄（吉沢亮）と、梨園の御曹司俊介（横浜流星）が繰り広げる友情をベースに、2人の中の葛藤と浮沈が描かれている。原作の小説『国宝』（吉田修一

「国宝」が描く“生き抜く力”

著）も非常に秀逸で、多層な登場人物のさまざまな人生と人情が横糸として織り込まれている。一方、映画は人物も筋も大胆にそぎ落とし、喜久雄と俊介の生きざまに光を当てている。筋が単純化された分、李相日監督のメッセージがより直接的に観客へ届いている。

ネット上には「今まで漠然と生きてきたけれど、もう一度、懸命に生き直したい」といった若者の声が並ぶ。歌舞伎にも舞踊にも縁のなかった2人の俳優が1年半余りの稽古を積み重ね、命がけで役に向き合った姿に触発された言葉ではないかと思われる。ラストの名場面「鶯娘」を飾った吉沢亮は、踊りに没入し、自分の呼吸音しか聞こえなかったという。「美しく踊れることはわかったから、今度は喜久雄で踊って」との李監督の言葉に渾身で応えたという。

監督が求めたのは歌舞伎の美しさや技巧ではない。浮沈の多い人生を必死に生き抜こうとする若者の姿だったのだろう。そこに前述の若者たちの声が重なって聞こえる。

俊介は名門の血を受け継ぎ、喜久雄は類いまれな才能に恵まれている。だが、そのどちらも持ち得ないのが私たちでもある。それでも引き

込まれるのはなぜか？

劇中で私の心に残ったセリフがある。「あなた歌舞伎が憎くて仕方がないのでしょ。でも、それでいいの。それでもやるの」。人間国宝で大先輩の万菊（田中泯）が、不遇に苦しみもがいている喜久雄（小説では俊介）に向けた言葉だ。人が何かを突きつめるときの本質を射抜く言葉ではないだろうか。

「もついやだ」と思うことは、どのような世界に身を置いてもあり得る。それでも続けられるのは、それがなんでもあったとしても、そのどこかが好きでたまらない、自分の存在意義がそこにあると感じるからだろう。その思いに真摯に応えていくことが、自分自身を大切にすることにつながる。この心を軸としている限り、人は己の人生にさらなるステップを切り開くことができる。迷い揺れつつも、自身の人生を懸命に模索しようとしている若者たちにとって、力と夢をもらええるメッセージに他ならない。

日本の伝統芸能に携わる人々だけで創られた作品ではない。映像美を支えた撮影監督ソフィアン・エル・フアニはチュニジア出身で、フランスを拠点に活躍している。李監督のルーツは朝鮮半島だ。グローバルな才能が集い、ひとつの作品を紡ぎ上げたことに深い感慨を覚える。役者、スタッフ、美術、音楽、エキストラ等々、誰一人欠けても成立しなかった国境を越えた多くの人の献身が結晶した作品である。

新しい年度を迎える若者たちの人生もまた、多くの人のまなざしと愛に包まれながら、豊かに展開してほしい。『国宝』が描いた“生き抜く力”が、若い世代の歩む道を照らす一筋の光となることを願っている。